

## 伊勢物語

市川浩

市川浩

昨年八月より藤が丘教室（正式には横濱市ユートピア青葉「文語の會」）にて伊勢物語を講讀始め、本年十月全篇讀了す。顧みれば平成二十二年十月御縁ありて本教室にて文語の講讀を開始してより七年、文語名文百撰、明治大正文語五十撰などより始めて、宮澤賢治の文語詩百撰及び同五十撰と讀み進み（一部）、二十六年十月より約二年、徒然草全篇を讀み終りて、謂はゆる中等文語文法による品詞分解式讀解法も漸く板に付き、今回本書に近づくを得たり。

國語の歴史に徴するに、長き無文字の世を降りて漢字傳來して書き言葉の建設始めてより、奈良時代に記・紀・萬葉三種の表現を産み、平安時代中期延喜の御代、遂に古今和歌集假名序に結實すと云爾。然れどその先達には開發者の名も分かぬ假名の發明といろは四十七の字母確定あると共に、未だ奈良の名残ある六歌仙時代を受くる伊勢物語の存在を見逃すべからず。本書亦作者のみならず書名、成立年代も詳らかならず、要は原書に後代名も知らぬ人々加筆を重ねて今日文語體或いは文語文と稱する國語書き言葉の完成を劃したりけむ。かくてこの伊勢物語、歌物語の最高傑作として、且つ平安時代に花咲ける物語文學の先驅としてその名を欲しきまゝにせるも、題材が男女の交情に偏する故にか、中學高校にて實際の原文に接する尠かりけるを惜しむ。

今回使用の岩波文庫版の原典校注の大津有一先生による脚注は、掲載歌と同じ歌の他文獻所載を明示して當該和歌の意を酌むを助く。大半は物語所收と變らざるも、變りあらば必ず意味明確化する。一つの例として謂はゆる定家本にはなき章段とて、第百三十五段に

むかし、をどこ、すゞるなる所に行きて、夜あけてかへるに、いひさわぎければ

月しあればあらはむことも知らずして寝てくるわれを人やみつらむ

「あり」は屢々詞を補ふを要し、この場合月が明く照る様を示し、次の「あらはむ」には脚注に萬葉十一「月之有者明覽別裳不知而寐吾來乎人見兼鴨」古今六帖五「月しあれば明くらむわきも知らずして寝てにし我をひとみけむかも」とありて、萬葉の「明覽」、古今六帖の「明くらむ」が對應す。よりて「あり」の未然形＋繼續の上代助動詞「ふ」の未然形＋推量の助動詞「む」の連體形の接續と判明す。即ち「月が出てゐたら夜明けまで照り續かうとも知らずに歸り途、私はまるで後朝きぬさぬの別れをして來たと人に見られてしまつたやうだ」。かゝる添削的作爲の見ゆるは紀貫之にこそ相應しければ、最終作者説に魅力感じて已まず。

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして（第四段）

この歌古今和歌集假名序に「その心餘りてことばたらす」の評あり。拙講にては先づ初句の「や」を係結疑問の働ぎとし、「あらぬ」は例によりて詞を補ひ、次句の「昔の春」よりして、「昔の月の照るなき」をいふ。而して上の句昔の月の輝きや春の花やぎ今や失せたるかと思ひ惑ふ一方、下の句御姿を消し給へる方への己が戀心は變らずとの對比を示し、密かに再會に望みを託す。後日土田龍太郎先生より、牡丹花肖柏の「后にあひたてまつらねば、月もあらぬ月におぼえ、春も昔の春とおぼえず、わが身ももとの身とも思はぬよしなり」を引き給ひて倒さかしま言ことばと見ではあるべからず」と伺ひ、さても

深き御洞察、我の及ぶ所に非ず。げに常人富士に登ると雖も、焉んぞ北齋、大観の感受、表現に及ばむや。されどこれ藝術の本義垣間見るに非ずやと、有難く嬉しびにけり。

(平成二十九年十一月十四日受附)

